

● ドリーナ バレエ シリーズ〈10〉

じゅん ぎょう

たび

巡業の旅へ

ジーン=エストリル作／片岡しのぶ訳



Drina Ballet Series

●ドリーナ・バレエ シリーズ 10

巡業の旅へ

N.D.C. 933 266p 18cm

©1982 Shinobu KATAOKA

発行 1982年4月 初版1刷

作者 ジーン・エストリル

訳者 片岡しのぶ

発行者 今村 広

発行所 偕成社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3-5 〒162

振替 東京5-1352番

印刷所 中央精版印刷株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえます。 Printed in Japan.

ISBN4-03-730100-8

● ドリーナ バレエ シリーズ 10
じゅん ぎょう たび

巡業の旅へ

ジーン = エストリル・作
片岡しのぶ・訳



偕成社

DRINA GOES ON TOUR

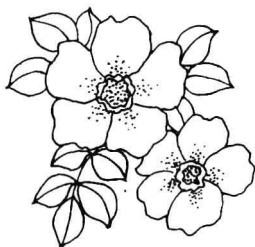
Copyright © 1965 by Jean Estoril

Japanese edition published by KAISEI-SHA Co.1982
by arrangement with Kern Associates.

● この物語について

ドリーナは、おかあさんが有名なバレリーナのエリザベス・アイボリーであることを、長いあいだひみつにしてきました。ところが、ふとしたことから、そのひみつがあかるみのでてしまったのです。マスコミや世界じゅうのバレエ団からのさそいが、ドリーナに殺到しました。けれども、ほんもののバレリーナになる決心のドリーナは、どんな誘惑にもまけないで、上級クラスにすすみます。

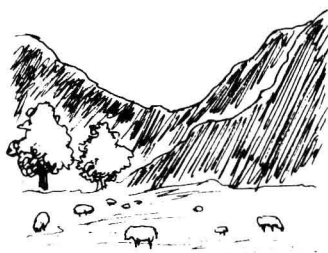
十一月、思いがけないことがおこりました。公演旅行にでかけていたドミニク・バレエ団のメンバーが流感でたおれ、ドリーナたちは、代役として、北方へ旅だつことになったのです。いよいよ巡業の旅です。けれども、バレエ団の公演旅行という、はなやかなイメージとはぎやくに、ゆくてに待っていたものは……。



もくじ

第一部 アイボリーの娘 むすめ

さよなら レッド・ライオン 広場 ひろば	8
ジェニーとのひととき	26
ひみつを知られて	46
ドリーナのとまどい	70
ニュースがひろまる	90
資格試験 しかくしけん	112
ふたたびイタリアへ	131



第二部 あたらしい旅たち

ジェニーの結婚式 けつこんしき	150
上級生になつて じょうきゅうせい	163
北へ旅だつ きたたび	180
ドリーナとクイーン	193
ゆううつな公演 こうえん	204
未来への決意 けつい	226
よろこびのドリーナ	241
* バレエ用語解説 ようごかいせつ	262
* ロンドンの中心街 ちゅうしんがい	264
* 解説 かいせつ	266



筆者紹介

訳者 片岡しのぶ（かたおか しのぶ）
1938年、和歌山市に生まれる。国際基督教大学・バベル翻訳学院卒業。1979年度、翻訳奨励賞優秀賞（「翻訳の世界」主宰）受賞。訳書 こんなふう生きてみた」（晶文社）。
住所 町田市小川11-10-22

画家 可囀知子（かよう ともしこ）
徳島県に生まれる。京都で西陣織帯紋意匠の仕事に携わり、上京後さし絵画家を志す。
住所 三鷹市井口331 七福梅荘11号

装丁 クリエイション・ハウス

第一部
アイボリーの娘^{むすめ}



さよなら レッド・ライオン 広場 ひろば

「かなしい気持ちになるだろうってことは、まえからわかっていたのよ」と、ドリーナがいいました。「だけど、いよいよほんとうにおわかれとなると、思っていたよりずっとつらいものね。」

ドリーナと、親友のローズ・コンウェイは、ドミニク・バレーエ学校の教室の窓べにたたずんで、レッド・ライオン広場をながめていました。広場のまんなかに立っている木ぎが、つめたい風にかすかにゆれています。三月の空には、大きなふわふわした雲がいくつもうかんでいました。

学校がいまの古い建物から、ユーストン・ロードの新しい校舎へ移転することになったとはじめてきたのは、もう何か月もまえのことです。あれから、ずいぶんたくさんのことがおこりました。おかげでふたりの少女は、いつかはくるはずだった、きょうの悲しみを、いくらかわすれていることができました。

ドリーナは、秋から冬にかけて、ルガノの教養学校で三か月すごしました。おじいさんのチェスター氏が、イギリスで冬をこしてはいけなないと医者さまに忠告をうけたので、いっしょにいてあげるためにスイスへいったのです。

チェスター夫妻とドリーナは、アルプスのカンデルシュテークというところで、クリスマスをむ

かえました。カンドルシュテークにはローズもきて、おなじホテルに滞在しました。そのあと、ドリーナはおじいさんたちにわかれてロンドンへ帰り、アデル・ホワイトウェイさんのアパートに身をよせました。ダンスや学科の勉強にいそがしいうちに、一月と二月がすぎ、三月ものこりすくなくなりしました。そして、きょうは学期の最後の日です。今学期はいつもの学期より早くおわりました。三月三十一日で、いまの校舎の賃貸期限がきれるからです。

ちようど午前の休み時間で、クラスメイトたちは、下でミルクをのんだり、ビスケットをかじったりしながらおしゃべりをしていましたが、ドリーナとローズは、どちらがいうともなく教室にのこりました。ふたりは、明るい日ざしのふりそそぐ窓ぎわに、よりそうようにして立っていました。ふたりとも十六歳です。ドリーナは、いまだに十六歳という年齢よりずっと小がらです。なめらかな黒い髪をゆらゆらさせて、すきとおった白い肌をしています。ローズは背が高く、とてもきれいな栗色の髪をしています。ローズも青白い肌をしています。ドリーナのように健康な顔色ではありません。

ローズは、アールス・コートの小さな家に、おおぜいの家族といっしょに住んでいます。先学期、ローズはずっと病気がちでした。アルプスでクリスマスのお休みをすごしたあと、かなり元気にはなりましたが、まだかぜをひきやすくて、かわりやすい早春のお天気には、ちよつとまいっているようです。

ローズは、ほっとため息をもらしました。ドリーナとおなじように、なつかしいこの校舎こうしゃとのおわかれが、かなしくてならないのです。もちろん、このみすばらしいまの建物たてものにくらべたら、新しい校舎こうしゃははるかに住すみごこちがいいにちがいないのですが、ふたりともやっぱりここがすぎなものでした。

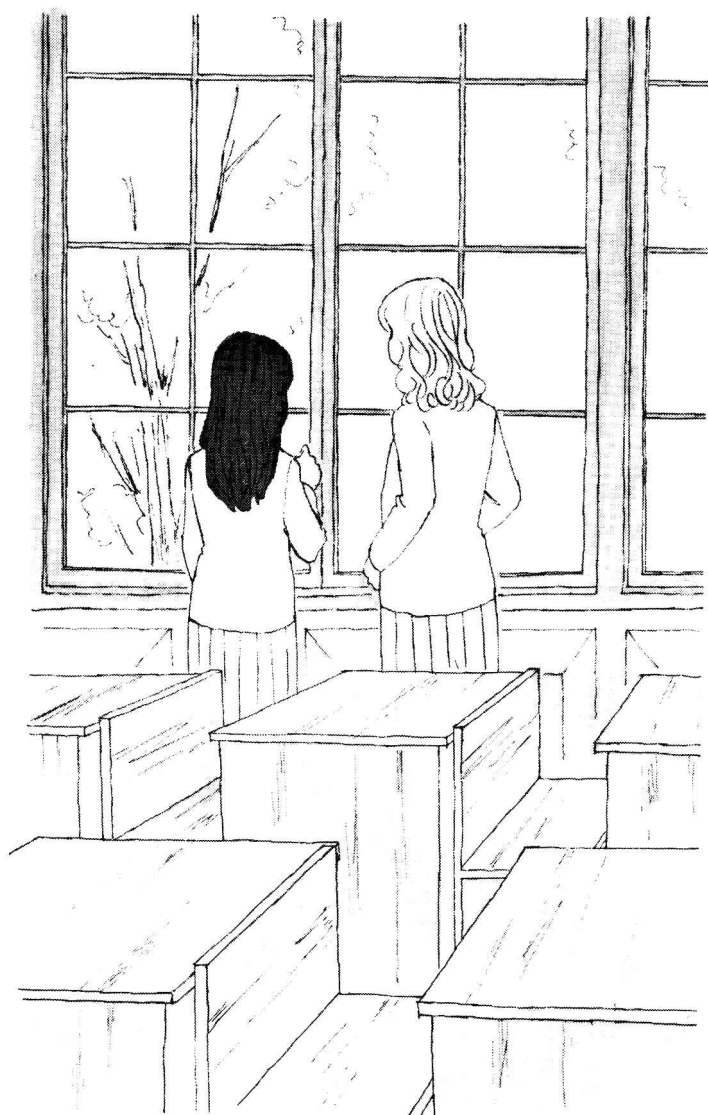
「広場ひろばもすっかりかわっちゃったわね。わたしたちがここへきてから、このまえの一月でちょうど四年ね。だけど、なんだかもっと長ながかったみたい。」

ドリーナはそういうと、かなしそうに広場ひろばに目をやりました。レッド・ライオン広場ひろばのむかいがわには、以前いぜんは十八世紀せいぎふうの家がたくさんたっていたのですが、いまではもう、かぞえるほどしかのこっていません。広場ひろばの西にしがわには、大きなビルがたちならんでいて、その前まえの通りを、車くるまの列れつがたえまなくながれていきます。

「ニューヨークの、高いモダンなビルならすきよ。でも、この広場ひろばがむかしのようでなくなるのは、いや。もうじきドミニクはなくなってしまうて、あとにコンクリートとガラスの大きな箱はこができるんだわ。ねえ、ローズ、わたしたちがはじめてあった目のこと、おぼえてる？」

「オーディションのときのこと？　もちろんおぼえてるわよ！　あのとき、あたしすごく気分きぶんがわるかったの。」

「そうだったわね。あんた、まっさおな顔かおをしてたわ。とってもかわいそうだと思っただのよ。自じ



分でもこわくてぶるぶるふるえてたけど。合格しなかったらどうしようって、心配でたまらなかったの。それから、クイーンⅡロシントンにはじめてあったのも、あの日ね。スミシーとかいう家庭教師といっしょにはいつてきて、自分のおかあさんは、むかしベリルⅡパートラムというすばらしいダンサーだったって、みんなにいいふらしてたじゃないの。」

「いいふらしたのは、あるときばかりじゃないわ。あれ以来、しょっちゅうよ。だけど、ベリルⅡパートラムは、ほんととそんなにすごいバレリーナだったわけじゃないのよ。バレエ団のソロイストだったってだけでしょ。」

「それから、ビルって男の子もいたわ。チューインガムをかみながら、バレエよりテスト・パイロットのほうが好きだっていつてたの、おぼえてない？」

「あら、すっかりわすれてた。だけどいま思い出したわ。あの子、試験官の先生の前でもそういったのよ。あの日の試験官は、ドミニク先生とボロネーズ先生だったけど。もちろん、あの子はおちたわね。」

「おかあさんって人、かんかんにおこってたわよ。だけど、あたしたちは、とにかく合格したわ。あんまりうれしくて、この世はほんとにすばらしいと思ったものよ。もちろん、あれからすばらしいことばかりだったわけじゃないけど。最初のうちは、なにしろいつもびくびくしてたし、学校になれてからだって、ずっと心配の連続だもの。才能がぜんぜんないんじゃないかって心配で——」

ドリーナは、ちょっとまゆをくもらせました。あのころの心配ごとや悩みを、いちどきに思い出したのです。

「クイーンは、いつもいじわるだったしね。あの人、あたしのコートのことで、ひどいことをいったことがあるのよ。制服のコートができてくるまえだったけど。だけどドリナ、あんたはいつもあたしの味方をしてくれたわね。あんたって、ひと目見ただけで、とくべつの人って感じのお嬢さんだったけど——」

ローズはドリーナに、あたたかなまなざしをむけて、ちょっといたずらっぽくほほえみました。ドリーナはほおをそめました。

「あらほんと？ いやあだ。」

「なにしろ、あんたのアパートはウエストミンスターにあつて、ほしいものはなんでももってる女の子だったもの。おまけに、あつというまにウエスト・エンドの劇場で、主役をやったでしょ？ それからずっと、胸がわくわくするようなことばかり、いっぱいやってきたじゃない。新聞にだつてのったしさ、少女スター、ドリーナ・アダムズさん。」

「でも、あたしたちはずうとなかよしだったわね。それにあたし、いまはもうスターなんかじゃないのよ。ただの、勉強中の生徒ですもの。来学期は資格試験よ。そのあとは、運がよければふたりとも上級クラスへすすめるわ。いい成績で資格がとれたら、上級へいれてくださるって、約

束^{そく}していただいたんですもの。がんばらなくちゃ！ そのあと、今^{こんど}度は、バレエ団^{だん}の端役^{はやく}ってわけよ。ああ、あのころはほんとにバレエ団^{だん}のメンバーになれるなんて、これっぽっちも自信^{じしん}がなかったわ。」

「思いだすと、なつかしいわね。」ローズは、まだむかしを思いかえしているようです。「ほら、最初^{さいしよ}の学期^{がっき}だったかしら？ ふたりで学校のへいの上にのぼって、バレエ団^{だん}の練習室^{れんしゅうしつ}をのぞいたことがあったでしょ？ ドミニク先生に見つかっちゃったけど——」

「おぼえてるわ。バレエ団^{だん}の人たちが、リハーサルがおわって練習室^{れんしゅうしつ}からでていくところを、むちゅうになつて見おくれたものね。いつまでも広場^{ひろば}にぐずぐずしていて、あの人たちがでくると、あこがれの目でながめてたわ。みんな雲^{くも}の上にいる人たちって感じ^{かんじ}がしたわ。キャサリン^{キャサリン}^{コール}ビー、ピーター^{ピーター}^{バーノイズ}、ルネ^{ルネ}^{ランドール}、それに、ベティー^{ベティー}^ナは、あのころ、『クルミ⁽²⁾割り人形^{にんぎょう}』の小さなクララだったのよ。」

「あのころは、あんた、自分^{じぶん}がいつかエジンバラやパリで、小さなクララをおどるだろうなんて、思いもしなかったでしょ？」

「あら、ローズ、あんただって小さなクララをおどったじゃないの。あーあ、ほんとにたのしかったわ。いやなことだってあったけど——」

教室^{きょうしつ}のドアがいきおいよくあいて、イロンカ^{イロンカ}^{ロレンツ}がとびこんできました。イロンカはハン

ガリー人ですが、ロンドンへきてから、もうかなりたちます。おとうさんとおかあさんは、シェファード・マーケットでレストランをひらいています。おねえさんのテーザは、ドミニク・バレエ団のメンバーです。

「ここにいたのね！ ふたりとも、なにをしてるの？」

「むかしのことを思いだしていたのよ」と、ドリーナが答えました。「おばあさんなら、"センチメンタルになっていた" っていうところね。ローズとあたしがはじめてあった、オーディションのことを思いだしていたの。」

イロンカは、ふたりのところへちかづいてきて、窓のそばにたたずみました。イロンカも年齢のわりには小がらです。髪が黒くて、とてもかわいい少女です。イロンカは、きゆうにまじめな顔になっていました。

「わたしも、ドリーナにであったときのこと、よくおぼえていてよ。わたし、更衣室で泣いていたんだわ。おとうさんはとうていハンガリーからにげてはこれないだろうって考えてたの。あなたはとつても親切にしてくださったわね、ドリーナ、世界じゅうでいちばん親切な人だと思ったわよ。」

ドリーナのこまった顔を見たローズは、ふきだしました。

「イロンカ、あたしたち、ドリーナをほめすぎよ。ちょうどおなじことを、あたしもいまいったば